

熊谷市地産地消促進計画（案）に対するご意見と市の考え方

1 意見募集期間

平成27年7月1日（水）から平成27年7月31日（金）まで

2 意見の提出者数及び意見等件数

提出者数 1名

意見等件数 2件

3 意見の内容と市の考え方

該当箇所	意見の内容	市の考え方
<p>P10～P12 3地域の特色と P23 ②「熊谷ブランド」の生産振興との関連について</p>	<p>(1)これまでの経験知から①熊谷地域②大里地域③妻沼地域④江南地域についての現状結果が出ているが、地域の特性に合わせた生産物か否かのポリシーが明確でない。 農業従事者が減少し、農業経営の大規模化を前提にすれば、市場等を分析し、特徴ある農産物に重点志向することも大事だと考える。 そのためにも常にリーダーシップがとれる人材育成も必要である。 自部門にパワーがない時は他団体の力を今以上に活用するような手段をとることが大事である。</p> <p>(2)「熊谷ブランド」の生産振興として ア高い評価を得ている熊谷の野菜等を「熊谷ブランド」としてアピールします。 イ「熊谷ブランド」構築に向け、新たな農産物や品種の開発、生産を支援します。 ウ「熊谷ブランド」の直接販売システムの構築を支援します。</p>	<p>(1)各地域の生産物については、各地域の生産者が地域の土壌や気候に適し、市場が求める農産物を試行錯誤を重ねながら生産してきたものと認識しています。 P23【基本的な考え方】のとおり、消費者ニーズに対応した農産物の生産に努めることが必要なことから大里農林振興センターやくまがや農業協同組合などの関係機関や埼玉県農業大学校等と連携して新たな農産物の開発等、産地づくりに取り組みたいと考えています。</p> <p>(2)「熊谷ブランド」の構築や、アピールにあたり、頂きましたご意見のとおり、「ダウンサイジング」を含めた検討が必要であると考えます。また、施策を展開するにあたっては、国、県の研究機関や民間の団体等と連携を取りながら積極的に進めていきたいと考えています。</p>

とあるが、「ミニ野菜」がなぜ高い評価を得ているのか？「熊谷ブランド」になりうるのかについて明確な分析が必要である。核家族化した小所帯では「残る野菜」よりもその都度消費できる「新鮮な野菜」が食べられる「ミニサイズ」が好まれているのではないか？もしそうだとするとすべてについて「ダウンサイジング」を検討する価値があると思う。

開発その他の新しいシステムを構築するには、より一層先進的研究活動をしている国、県、民間の団体とコラボが必要と考える。

熊谷には「農業高校」の伝統もあり、周囲にも県の出先研究機関・実施機関がある。

「構築を支援する」だけでなく、「担当者を関連機関に積極的に派遣して実現を図る」等の積極的施策展開を期待している。